

たが、しかし實はその系統はベルラスと云ふて、古くから土耳其に名高い部族に屬するので、蒙古の成吉思汗が勢力を得た時には、彼の五代の祖先に當るカラシヤールといふ人は、父とゞもにその部下に馳せ參じ、ベルラス族の名は逸早く蒙古の記録に見えて居る。此のカラシヤールといふ人は成吉思汗の第二子なる察合臺、即ち中央亞細亞の地方を領して、察合臺汗國の基を作つた人の宰相として、父の成吉思汗からつけた人で、千二百七十年に没して居る。ケシュの地方は實に此の人の時からベルラス家の所領となつたのである。それでは何故に帖木兒が蒙古族として傳へられたのであるかといふに、これは彼自身がその基を作つて居るのである。彼の自傳と稱せらるゝ『ツザキ・チムーリ』といふ書物に察合臺の宰相カラシヤールが自分の祖先であると書き、また彼の父から聞いたこととして成吉思汗と自分の家とは同一の系統であるとのことを記して居るのである。此の傳説のあてにならぬことは今一々論證する要はあるまいが、それにしても折角の自分の系圖を偽つて、何の必要があつて蒙古族といはなければならなかつたのであるかとは、人の疑問とする處であらうと思ふ。しかしその理由は極めて簡單である。後に彼が出た當時の此の地方の有様を説けば判然することではあるが、要するに當時は例へ有名無實にしても、察合臺系統の君主が引き續いて此處を支配して居たのだから、彼が新たにこれを統御するに當つては、その血統に屬するものであると稱するのは甚だ利益のあつたことでもあり、よしまだ利益の問題は別としても、少くとも名門を誇るに足つたであらうと思はれる。尤も彼が此の蒙古系の家からその妃を迎へたことは明らかであるが、それはもとより彼自身の系統に關係するものではない。